

Title	第60回岐阜外科集談会
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1971), 40(1): 117-119
Issue Date	1971-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/207916
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

口よりの出血を認む。入院時 RP 上, 右尿管下部に陰影欠損を認め, 尿管カテーテル挿入時抵抗あり。10月7日尿管腫瘍として, 尿管摘除術兼膀胱部分切除術を試みたが, 術中不整脈著明なため, 2 週後, 二次的に腎

摘除術施行。組織学的に乳頭状移行上皮癌 (Grade I) であった。本邦報告例に自験例を加えた 280例につき若干の統計的考察を加えた。

第 60 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時: 昭和46年2月25日午後5時30分

場所: 今回は都合により岐阜会館5階

1. 新生児 Bochdaleck 氏孔ヘルニアの

1 治験例

岐阜第2外科

田 辺 祐 介 榎 本 良 友

最近我々は新生児 Bochdaleck 氏孔ヘルニアの1例を経験したので弱干の考察を加え報告した。

症例: 生後4日目の男児

現病歴: 満期安産にて生下時体重は 2,500g であった。生後2日目より呼吸困難, チアトーゼをきたし, 生後4日目に胸部X線にて横隔膜ヘルニアと診断され緊急手術を行った。

手術所見: 上腹部横切開にて開腹した。左横隔膜中央部に 3×4cm の裂孔を認め, 右大腸, 胃, 脾, 小腸が腹膜に包まれ胸腔内に脱出しており, 腸回転異常を伴った真性の Bochdaleck 氏孔ヘルニアであることが判明した。これらの臓器を還納し, 腸回転異常に対して Ladd の手術を行った。腹壁は一次的に縫合し得た。

術後経過: 術後3日目より排便があり, 又術後4日目まで左胸腔内の穿刺による脱気が続けたが左気胸の改善なく, これを中止し経過を観察していると, 左肺は徐々に膨張し, 術後22日目には左気胸は消失し, 同日全治退院した。

2. 腸捻転をともなった腸管回転異常の1例

岐阜市民病院外科 三 尾 六 蔵

岐阜第2外科 堀 部 廉

生後8日の男子で, 生後6日目より胆汁性嘔吐を来した腹部単純レ線撮影で典型的な double bubble sign と注腸透視による結腸の位置異常を示した腸捻転をともなった腸管回転異常の1例を報告した。

開腹時の所見より, 本症例はGrohの云うmalrotation II型に属するものと考えられた。又腸回転異常

に腸捻転が生後間もなく合併する事由につき2~3の考察を加えた。

3. Polyp に先導された新生児空腸重積症の1例

岐阜第2外科 細 野 和 久

症例は5日目の女児, 主訴は嘔吐で, 妊娠分娩経過には異常なかった。生下時体重 3,250gr. 生後29時間目に母乳を与えたところ嘔吐し其の後も授乳各に嘔吐した。meconium は生後24時間の間に4回あった。3日目にはタール便の排泄あり, 脱水のため間代性痙攣来し来院す。胃十二指腸透視で小腸上部にガス像著明にて小腸上部の閉塞を疑わしめ開腹術を行った。横切開して見ると“トライツ”より約40cm anal に約5.0cm の Invagination を認めた。ハッチンソンの手技にて嵌人腸管を圧出すると, 先端に大豆大のtumorを触れるためこれより oral に3.0cmの縦切開を加えtumorのみ摘出する。このtumorは, 胆嚢が胆管の迷入を思わせる組織奇型による polyp であった。患児は術後13日目に縫合部穿孔による汎性の性腹膜炎と腸閉塞症にて死亡した。本症は非常に稀で本邦では未だ10例の報告をみるのみである。

4. 小児大腸ポリポージスの1治験例

岐阜大1外科

小川隆司, 下野達宏, 後藤暗彦

小児大腸ポリポージスは比較的稀なものであり, 最近我々は6才男子で血清蛋白 4.9g/dl 赤血球数 277×10^4 で, 輸血, プラスマネートの投与にもかかわらず, 貧血, 血清蛋白の改善は見られず, 蛋白漏出を伴った大腸ポリポージスと診断し, 広範囲結腸切除, 回腸直腸吻合術を施行し, 術後赤血球数 400万以上血清蛋白 7.5g/dl 前後と著明な改善をみた。摘出標本は盲

腸からS状結腸に最高7cmのものをはじめとして総計75個の球形あるいは乳嘴状のポリープを認め、組織学的には adenomatous polyp で一部 juvenile Polyp に似た polyp もみられた。

5. 最近経験した肺アスペルギルス症の2例について

国立療養所 岐阜病院外科

松本守海 小林君美 加藤康夫
井上律子 浅野 靖

我々は、最近、肺結核症に続発した肺アスペルギルス症の2例を経験し、肺切除術によって治癒せしめ得たので報告する。

症例1, 35才の男子で、昭和29年肺結核で入院し、1年間の化学療法および左人工気胸術を受け、軽快退院した。その後、順調に経過していたが、昭和44年5月咯血を来し、肺結核の疑いで本院に入院した。胸部レ線写真および断層写真所見で Fungus ball をみとめ、肺アスペルギルス症の診断で左肺全切除術を行なった。空洞内容物よりアスペルギルスの菌塊を検出している。

症例2, 25才の男子で、昭和35年6月咯血を来し、某医で肺結核の化学療法をうけ、軽快し、昭和44年9月より就業した。昭和45年再度咯血を来し、肺結核の疑いで本院に入院した。胸部レ線写真および断層写真で Fungus ball と思われる所見をみとめ、肺アスペルギルス症の診断で右上葉切除術を行なった。空洞内容物よりアスペルギルスの菌塊を検出している。2例とも術後経過は良好である。

6. 右心症兼大血管転位症の1例

岐阜大第1外科

小野文瑛, 小川隆司, 広瀬光男

症例は、6ヶ月の男児。主訴は、顔面指趾のチアノーゼで、胸部単純撮影、右心造影、心電図より、右心症兼大血管転位症と診断した1例に、若干の文献的考察を加え、報告した。

7. 胸腺腫

県立岐阜病院 放射線科 奥 孝行

1内科 藤塚 正功

第1例: 29才男。某院で胸腺腫の手術をうけた。腫瘍は浸潤性に左肺内に増殖、完全摘出は不可能であったため当科で術後照射を施行。2年半後に腫瘍は再発

し再度の照射に反応せず遂に死亡。

第2例: 32才男。他院で胸腺腫の手術をうけたが左肺内部に占居したものは肺動脈に固く癒着したため完全摘出は不可能であった。当科で術後照射を施行。5年後の現在、再発の徴候なく健在。

第3例: 36才女。四肢の脱力感と呼吸困難、頸部顔面の浮腫にて来院。広汎な縦隔腫瘍で右胸水を伴っていたが、放射線により自、他覚症は著明に改善され、レ線像も略々正常となった。一般に胸腺腫は放射線感受性が高く、3~4000R にて腫瘍は完全に消失するとされており、一応試みてみるべきである。

8. 腋窩部腺癌の1例

渡辺病院 渡辺 祥
岐阜大第1外科 西 仁, 福田甚三

72才、女子。主訴、左腋窩腫瘍、既往歴・家族歴、特記すべき事なし、分娩3回授乳正常。数年前より左腋窩湿疹、1年前よりその部に腫瘍を生じ徐々に増大、2ヶ月前に大出血。入院時栄養や、不良、貧血強度、頸部・鎖骨窩・そけい部リンパ腺腫脹触れず。両側乳房異常を認めず 副乳(-)。胸部X線写真異常を認めず。左腋窩に約10×15×10cmの腫瘍、表面湿潤、分泌多量、結節様、弾性硬、膿様苔あり。深部と癒着程度。昭和46年1月13日 GOF 全麻下、筋肉への浸潤を含めて腫瘍切除術、リンパ腺廓清術及び皮膚移植術施行。腫瘍約200g 実質性。組織所見、切出した部分では転移性の乳頭様腺癌。呼吸器、消化器等に異常を認めず、原発巣不明で今後の検索を必要とするが恐らく異所性乳癌と思われる。上記症例報告するとともに原発巣について若干の考察を行なった。

9. 脾臓悪性腫瘍の1例

松波病院 外科 松波英一 ○和田英一
西 仁 鬼束惇哉
内科 杉山公二 今井幸一

45才、男子、腹部の膨満感の主訴で来院、脾腫を指摘され、手術により重量1,400gの脾腫瘍を剥出し、脾臓原発性と考えられる悪性リンパ腫を認めた症例を報告し、若干の文献的考察について述べた。

10. 成人にみられた輪状膵の1例

岐阜日赤病院 松浦昭吉, 原 節雄
岐阜大放射線科 金武喜子

17才男性で、食後腹部膨満感、体重減少を主訴とした患者で、胃X線透視にて、十二指腸下行部の狭窄を

示摘され、手術施行する。手術所見としては、十二指腸下行部に鶏卵大、弾性硬、表面平滑な輪状瘻であった。本例には、輪状瘻の切除及び十二指腸拡張術を施行し、術後経過良好で、10kg 体重増加をみとめた。

11. 被包性腹膜炎の1例について

岐大第2外科

坂本武嗣 大橋広文

患者は肺結核の既応のある64才の男子。悪心嘔吐及び腹痛（痙攣様）を主訴として受診、諸検査の結果、瘻嚢腫の診断の下に手術を行った。前腹壁腹膜と癒着せし大人の頭大の嚢腫様の腫瘍が認められた。この腫瘍は表面平滑、灰白色のかなり厚い被膜におおわれた腸管の一塊よりなりたっていた。被包臓器は十二指腸と回腸末端を除く小腸のほぼ全部であった。その他の臓器は被包されていず、また異常所見は認めなかった。また認むべきリンパ節腫脹はなかった。術後、患者は悪心嘔吐を訴えなくなり、19日目軽快退院した。

病理組織検査の結果、被膜は結合組織の増生著明な肉芽よりなり、結核病変は認めなかった。

被包性腹膜炎の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

12. 糞石を内容とした空腸憩室の一例

羽鳥病院外科

佐野 彰 岩島康敏 河村雄一

症例、患者は68才男。上腹部激痛を主訴として来院し、急性腹症として開腹した結果、糞石を内容とした空腸憩室炎であり、術後透視により、十二指腸憩室の合併を発見した1例を報告し、若干の文献的考察を加えた。

13. 巨大な後腹膜神経線維腫の1例

岐大第1外科

林 淳治、岡部一誠、馬場英逸

今回、我々は、短期間に腹部の異常な膨隆をきたし、更に、同部に搏動をみたため、動脈瘤の疑いありとして、紹介されて来院し、開腹により、成人頭大の後腹膜の神経線維腫であった患者を経験したので報告します。

元来、後腹膜腫瘍は、比較的稀なもので、その種類にいたっては、多種多様であるが、神経鞘腫の起源は、神経鞘から発生するが、その組織学的特色は、紡錘形または、長楕円形の細胞と、腫瘍細胞原形質が、分化して出来たと思われる Neurinom 線維が、多数みられることである。神経鞘腫にコラーゲン化が亢進すれば、神経線維腫に化生し、又この間に移行型が存在する。

14. VUR 防止術の1治験例

岐大泌尿器科 太田信夫 田村公一

伊藤文夫 笹谷唯美

症 例：○田○子 女 6才

初 診：昭和45年11月27日

主 訴：発熱

現病歴：某医にて感冒の診断のもとに治療を続けたが、（6月より）発熱をくりかえす。11月になって他医で左膀胱尿管逆流を指摘され当科受診

経 過：逆行性膀胱造影（排尿時、8%コンレイ100cc）にて両側 VUR を認めた。

12月17日グレゴアールの手術を施行術後経過。逆行性膀胱造影（排尿時）にて VUR を認めず。

膀胱尿比較	術前	術後1ヶ月
タンパク	(-)	(-)
赤血球	(-)	(-)
白血球	4～5/視野	0～1/視野
上皮	(+)	(-)
細菌	(-)	(-)